

舵を切る

「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文 福永無想



第十回 「さらば、勝子」

明治2（1869）年1月5日。横井小楠は御所参賀の帰途で暗殺された。新政府の参与として京に上り、新しい国づくりを提唱したその思想を「売国奴」と勘違いした十津川郷士の数人に襲われた。十津川郷士は南大和（奈良県）で、古くから朝廷に仕えてきた者たちだった。

小楠が殺される前夜のことだった。4女の久子の夫で水俣の郷士・徳富一敬はこんな夢を見たという。「夢の中で小楠先生が襲われ、わしは試合着にたすきを掛けて斬りまくった。虫の知らせかもしれない。久子、沼山津の様子ば見えてくれんか」

早速、久子は水俣から船で松橋にわたった。陸路で熊本に向かう途中、偶然にも親戚の男に出会い小楠遭難を聞いたのだった。早駕籠を雇い沼山津に着くと、妹のつせ子に小楠の訃報を告げた。この時、つせ子は京の小楠から呼び寄せられ、上洛の支度を整えたとこだった。それからすぐさま、兄

の源助と順子の夫の竹崎律次郎が京へ向かった。その後しばらくして、沼山津に小楠の遺髪と短刀が届けられた。

一方、同じ頃、源助は新政府から土木大丞を任せられていた。土木大丞とは新政府を支える官職の幹部である。後の国土交通省となるものだが、この抜てきは、亡き父・直明との中山手永での土木の功績などが認められてのことであろう。源助は小楠の無念の死に報いるためにも、任務に身を賭すことを誓うのだった。そして、京の南禅寺天授庵の墓所に小楠を手厚く葬った後、その足で東京へ向かった。

小楠の死から数年がたち、離縁のうわさも収まった頃、勝子は次女の達子を連れ、杉堂の実家に戻ってきた。「よう帰られました」

懐かしいヨシの笑顔を見るのは久しぶりである。勝子は周りの薦めもあり、杉堂の家で寺子屋を開くことにした。ここにはヨシの孫らも通い、次々と子どもらは増えていった。そんな折、東京の源助が病に倒れたという知らせが届く。姉妹らが集まり、これからのことが話し合われた。「私が東京に参ります」

すぐに勝子は名乗り出た。姉妹の中でも、勝子だけが身軽であった。林家に残した息子の治定は熊本洋学校の寄宿舎に入り、長女のなも子も母・鶴子の実家で、櫛島か

ら本山に移った三村家の大屋敷で家事見習いをしてきた。だが、「幼い達子は連れていけまい」と、妹の貞子夫婦が預かると申し出た。とはいえ、片時も離さずにそばに置いた幼子を手放すのは、身が裂かれる思いだ。

ただ一方で勝子は、兄や姉夫婦らの維新の機運に乗じた活躍を尻目に、「離縁した女」の烙印を押されたまま、寺子屋の師匠で終わりたくはないと思っていた。そして単身、東京に上ることにした。

明治5（1872）年、勝子は杉堂から百貫港（現・熊本市西区）へ向かう。なれど女の一人旅は危険が付きもの。そこで無用の金は持たず、着物は二枚重ねに着込み、帯も芯に別の帯を一本縫い込むといういでたちで家を出たのだった。

夕刻、百貫港から長崎港にわたると、翌朝の船出までには時間があつた。船宿に一泊することにして、夜の帳が下りた港の棧橋を歩いてみることにした。

月明かりが、船泊にすぎ間なく並ぶ帆と船を照らす。船は静かな波に揺られて、ギンギンと音を立てた。勝子は思った。この大きな蒸気船を動かすのは舵である。ならば、わが心にも舵を据え人生の羅針としたい。と。勝子は「舵」を「楫」と変え、「楫子」と名前を改めることにした。

東京を目指す朝、昇った朝日が、生まれ変わった楯子の頭上に燦々と降り注いだ。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜（祝日の場合は翌日）

入館料/一般・高校生200円（160円）、小中学生100円（80円）

※（ ）は30人以上の団体割引料金

